「2009 分析展」見聞記

分析機器メーカーが一同に会する大規模な展示会「2009 分析展」が 9 月 2 日（水）から 9 月 4 日（金）の間，幕張メッセ国際展示場にて開催された。また，隣接するホテルでは「新技術説明会」が，国際会議場においては「JAIMA コンファレンス」「東京コンファレンス」が同時に開催された。思えば昨年以来，リーマン・ショックに端を発する世界同時不況がいよいよ本格化した。そしてこの数日前に行われた衆議院議員選挙では民主党が歴史的な大勝を果たし，自民党は下野した。政権交代によって果たして景気は回復するのか？　世間は期待と不安が入り交じった複雑な表情を呈していた。加えて，勢いを増し始めた新型インフルエンザも懸念された。このような時期に開催された「2009 分析展」はどうだったのか？　会場を訪れた筆者らが見聞記をまとめてみた。

残暑の中で行われる例年の分析展と違って，妙に涼しい秋の陽気の分析展となった。やはり地球環境がおかしくなっているのか，この点に普段と違った印象を持った参加者は多かったのではないだろうか。隣で開催中の恐竜展にも惹かれながら「2009 分析展」へ到着。会場の入口にはインフルエンザ対策として消毒用の自動噴霧器が設置されていた。いざ自動噴霧器のミストをくぐって中へと進む。分析展としては今年で第 47 回目を数える「2009 分析展」は国際展示場の 4, 5, 6 ホールを使用して行われた。入口から臨む限りは例年どおり活況を呈しているように見えるが，実際はどうであるのか。筆者らは会期中盤にあたる 9 月 3 日（木）に幕張メッセ内に設置された社団法人日本分析機器工業会（以下 JAIMA）事務局を訪ね，分析展委員会委員長の萱島信雄氏（㈱日立ハイテクノロジーズ）にお話しを伺った。

今年の総合出展社数は 296 社（総出展小間数 996）で，昨年の出展数 329 社に比べて約 10% の減少であった。やはり不況の影響から，JAIMA に属さないゲスト各社がやむを得ず出展を見合わせ，昨年の半分程度に減少したのが原因であるという。しかしその分，小間数を極力減らさないなど，会場配置を工夫したそうだ。また，今回から会場への入場は WEB サイトにて事前登録を行うシステムへ完全移行されたが，これによると取材当日までの事前登録者だけで 19,000 人を超えており，結果的にすべての日程を終えた時点での来場者数は合計で 20,534 名と，前年同様 2 万人越えを達成している（分析展ホームページより）。これらのおかげで，確かに参加する側からすると例年と変わらず盛況であるように感じられたようだ。

次に今年の目玉となるポイントとして，以下の特別企画コーナーを紹介していただいた。まず，昨年に続き JETRO（日本貿易振興機構）は独自の技術を持つ 24 社の海外企業を誘致，それぞれに通訳を配置してビジネスパートナーの発掘に力を注いだ。また海外からの参加としては International Organization Corner という一区画を設け，GAMBICA（英国工業界），U.S. パビリオンとして米国州政府在日事務所と PITTCON，また JAIMA 友好団体コーナーと各国大使館系列が計 18 のブースを出展し，非常に国際色豊かな展示区画を形成していた。

写真 1　肌寒い曇天の幕張メッセ。会場内の様子は？

写真 2　展示会場内の様子（今年も多くの人で賑わった）

国内の各団体からの出展も存在感を示す結果となった。JST（独立行政法人科学技術振興機構）はこれまでの先端計測分析技術・機器開発事業の展示に加えて，基礎研究領域である CREST の成果を加えて前年の約 2 倍の面積での出展となった。また，学会，協会のコーナー，研究機関コーナーには 20 近い組織，団体が出展し，会場の右側の壁一列にブースを並べた。また会場左の壁側には出版，新聞コーナーが設置され，19 社がブースを並べた。

企画展示の中でも今年は特にソリューションコーナーに力を入れたという。実際に委員が勧誘に奔走し，結果として 29 社（36 小間）の参加を得たという。分析に役立つ前処理，データ処理，センサデバイスなど，ユニークな技術が昨年よりも面積を拡大したスペースに集結し

た。さらに展示ブースだけでなく，オープン形式のプレゼン会場を併設，「ミニオープンフォーラム」と称するミニ技術説明会が行われた。これは周辺のホテルで開催される新技術説明会とは違って，手軽に足を止めて聞くことができることから，時には大勢の立ち見が出るほどの盛況であった。今年から始めたこのミニオープンフォーラムには，ソリューションコーナーの29社のうち12社からプレゼン参加があったという。

一方で，その本編とも言うべき新技術説明会も賑わいを見せた。説明会は25分テーマが157件，50分テーマが120件，幕張メッセ，アパホテル＆リゾート〈東京ベイ幕張〉，ホテルニューオータニ幕張の各会場にて行われた。全体の件数は昨年に比べて減少したものの，個々の会場は充実した内容であった。また，昨年に引き続き21件の日英同時通訳付講演が行われた。この試みも2年目にして早くも定着したように感じられ，国際化する分析展を印象づけた。

準備段階からJAIMAと日本分析化学会が合同で準備を進めてきた，東京コンファレンス2009（国際会議場内）もまた賑わいを見せた。鈴木孝治実行委員長（慶大理工）のもと，今年新たに企画されたのが「分析化学ショーケース」である。これは近年多く取り入れられているフラッシュプレゼンテーションとポスターの組み合わせ講演であり，学生や若手研究者，アジアからの人材の交流を目的として企画された。実に昨年を大幅に超える100以上の発表申し込みがあったため，より大きな会場を準備して開催された。若手研究者は常に新しい研究が生み出される現場を牽引する存在である。したがって，ここで発表された内容は本当に最先端の，且つ最新の成果であると言える。まさに今年の分析展のキャッチフレーズである「明日を担う新たな目」そのものであり，多くの注目を集めた。

写真3　新たに設けられたミニオープンフォーラム

写真4　GAMBICAコーナーとU.S.パビリオン

国際会議場内のコンファレンス会場では，例年どおり入門講座，講演会，専門性の高いテーマを取り上げたシンポジウムなどが連日開催された。なかでも「日中韓分析化学の最前線」と題した特別セミナーや日韓技術交流セミナーなど，極東アジア地域の結束を意識した交流企画が目立っていた。このあたりからも特にアジアの振興地域に対して日本の存在を示し，情報発信に努めようとするJAIMAと日本分析化学会の意図がうかがえる。

また，今年が世界天文年であることにちなんで「使う宇宙，知る宇宙」と題したサイエンスセミナーがJAXA（宇宙航空研究開発機構）の協力によって行われた。講演会とパネル展示で構成された特別企画だが，特に講演会は200人の定員に300人以上の聴講希望者が押し寄せるほどの大盛況となった。ISSに日本の実験棟「きぼう」が完成したことで，宇宙は遠くの夢ではなくなった。分析化学にも新時代の訪れを期待させるセミナーであった。

時代に合わせて変化してゆく分析展だが，今年は電子登録に完全移行したことから，各ブースでの受付がバーコードシステムに移行した。ユーザー参加者としては，いちいち名刺を差し出す必要がないので大変ありがたい。バーコードリーダーはまだすべての出展社には配置されていなかったようだが，今後はより速やかな情報交換が可能になると期待できる。

ところで変化と言えば，来年の分析展はこれまでとは大きく趣が異なるようだ。なんと全日本科学機器展（日本科学機器団体連合会）との合同展となることが取材前日に発表となった。会期は2010年9月1日から3日まで，会場は幕張メッセで行われるという。出展社の中には双方に参加している企業も数多くあると思われるが，相乗効果を期待する両者の希望が一致し，総合展の開催が決定した。総出展件数は1,400小間規模を見込んでおり，分析機器のみならず，科学機器全般をカバーする出展内容と，これに合わせた学術コンファレンスも企画する予定だという。

JAIMAによる平成20年度の集計を見ると，前年度まで右肩上がりであった分析機器の年間生産額は平成19年度の4,406億円をピークに，ついに下落傾向に転じてしまった。JAIMA会長の堀場　厚氏（㈱堀場製作所）も述べているように，本年度もまたこの傾向は続くと考えられる。しかし来年はひと味違う「分析展2010」＋「科学機器展2010」であり，新たな潮流を予感させるには充分である。肌寒かった分析展2009とは打って変わって，熱量を感じさせる合同展となるよう，我々も日本分析化学会の一員として盛り上げたいと思う。

最後に，ご多忙中にもかかわらず取材にあたってお時間を割いていただいた日本分析機器工業会の諸氏，ならびに分析展事務局，出展社の皆様に御礼申し上げます。

〔農研機構 食品総合研究所　池羽田晶文
九州工業大学　竹中繁織〕